

## 琉球大学学術リポジトリ

北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究：  
アメリカ合衆国本土・カナダ一世移民の現地調査事例を中心に（3）

メタデータ	言語： 出版者：沖縄移民研究センター 公開日：2018-11-13 キーワード (Ja): 北米, アメリカ合衆国本土, カナダ, 沖縄県出身移民, 一世移民, 面接聞取調査 キーワード (En): 作成者：石川, 友紀, Ishikawa, Tomonori メールアドレス： 所属：
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010096">https://doi.org/10.24564/0002010096</a>

## 北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究 —アメリカ合衆国本土・カナダ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅲ）—

石川友紀

- I. はじめに
- II. アメリカ合衆国本土一世移民の現地調査事例
- III. カナダ一世移民の現地調査事例
- IV. おわりに

キーワード：北米，アメリカ合衆国本土，カナダ，沖縄県出身移民，一世移民，面接聞取調査

### I. はじめに

明治期以降近代日本において、人口移動の一環とも捉えることができる日本の移民現象において、沖縄県は典型的な「移民県」と称されている。1978年以降琉球大学法文学部地理学教室の教員スタッフにより、沖縄県から世界に発展・雄飛していった移民について、「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」（第1次～第3次調査）、「北米における沖縄県出身移民の地理学的研究」（第1次～第2次調査）、「旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究」（平成12～15年度）と銘打って、文部省の科学研究費補助金による現地実態調査を実施し、多くの成果を挙げてきた<sup>1)</sup>。

本稿では拙稿「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究—ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（I）—」および「同上（II）」に引き続き、アメリカ合衆国本土とカナダにおける面接聞取調査により得られた一世移民（一部二世を含む）21名の証言事例を取り上げることにする<sup>2)</sup>。

### II. アメリカ合衆国本土一世移民の現地調査事例

#### 1. ロサンゼルス市の証言事例

##### (1) 伊芸カメ

1906年（明治39）9月23日生。ロサンゼルス市で1993年9月11日に面接聞取調査。調査時86歳11か月。金武村字金武並里出身。父宜野座蒲助・母ナベの4女。夫伊芸孝太郎（明治32年生）。尋常小学校を卒業した。実家は農業でサトウキビ・サツマイモ・コメを作っていた。

1924年（大正13）18歳のとき、ロサンゼルスに移民していた夫孝太郎の呼び寄せで、

単身日本の船で横浜港を出発、14日間でシアトル港についた（外務省の「海外旅券下付表」によると<sup>3)</sup>、伊芸カメは国頭郡金武村字金武804番地に本籍のある戸主孝一郎〇〇男孝太郎妻で、17歳9か月のとき米国（アメリカ合衆国本土）へ夫の呼び寄せとして、大正13年6月5日に旅券が下付されている）。

渡航1～2か月後、ロサンゼルス市で日雇いなど農業の仕事に従事した。そして、1941年12月の太平洋戦争勃発ときまで、同市のバレリーニに住んでいた。

1942年3月以後3年半、ロサンゼルス市のサンタニータに住んでいた。また、1945年9月まで、アーカンソー州のアッセンブリーのローワーセンターに移動させられていた。

1945年9月からロサンゼルス市のキングストリートで兄弟といっしょにガーデナー（庭園業）の仕事をした。1948年以降現在に至るまで、ウェーストロサンゼルスでガーデナーの仕事をし定住した。

国籍は日本で一世なので、市民権取得ための手続きを何年に1ぺんかしてきた。移民当時は永住のつもりはなかったが、現在はそうである。47歳から73歳まで26年間も、会社で裁縫の仕事にもついていた。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が4人で計6人である。子供は男性が2人、女性が5人で計7人である。現在は2男、5女と3人で暮らしている。家屋・宅地ともに自己所有である。

仏壇はないが、墓は日本人街のエバグリーンにある。宗教は仏教である。夫婦は沖縄方言を使い、親子・家族での会話は日本語である。沖縄料理はよく作り、アシテビチや牛肉、魚が好きで、子供は野菜はあまり食べないが、自分はキャベツなどよく食べる。

邦字新聞は『羅府新報』『五大洲』を購読している。日本語のテレビを観、ラジオを聞く。雑誌も日本語のものである。同郷人団体としては沖縄県人会、金武クラブに所属している。

模合（頼母子講）はかつて参加したことはあるが、現在はしていない。アメリカの銀行はよく利用する。戦前は横浜正金銀行があった。郷里への送金は戦前に行ったことはあったが、戦後はない。太平洋戦争直後、郷里の親戚などへ救援物資を送った。一時帰国（再渡航）はない。その期間に国内のハワイ旅行をしたことはあるが、乗物に弱いので実現しなかった。

## (2) 伊芸丹一郎

1895年（明治28）10月20日生。ロサンゼルス市で9月11日に面接聞取調査。調査時97歳11か月。金武村字金武出身。父伊芸丹蔵・母ゴゼイの長男。妻カマ（旧姓与那嶺）。金武尋常高等小学校を卒業、高等科2年生まで修了した。実家は農業で、水田で米作も行ってた。1915年（大正4）20歳のとき、ハワイ移民から米国本土へ移民していた父丹蔵の呼び寄せで妹と2人コレア号で神戸港を出航、サンフランシスコ港に到着した（外務省

の「海外旅券下付表」によると<sup>4)</sup>伊芸丹一郎は国頭郡金武村字金武131番地に本籍のある戸主丹蔵長男で、19歳2か月のとき、北米(米国本土)へ父の呼び寄せにより、大正3年12月29日に旅券が下付されている。また、妹カマド(丹蔵長女)11歳4か月も同行している)。

渡航後、サンフランシスコ市から父のいるロサンゼルス市へ来た。最初の土地はガーディナーで野菜やイチゴ栽培の仕事をした。その後、ホーソンなどいくつかの地域をまわり、トマトなどの野菜やイチゴ作りなどの農業に従事した。

1941年太平洋戦争が勃発すると、日本人のため1942年からサンタニータのアッセンブリで5ヵ月、アーカンソー州のローワリーロケーションで1945年8月までの3年間強制収容された。

戦後ウェストロサンゼルスで、5年間ガーデナー(庭園業)の仕事をした。その後、サンタモニカ市へ移住し現在に至っている。

国籍は日本である。移民当時は出稼ぎのつもりであったが、現在は永住の決意である。兄弟姉妹は男性が2人、女性が1人で計3人である。子供は男性が4人、女性が5人で計9人である。孫は23人、ひ孫は14人いる。家屋・宅地とも自己所有である。

仏壇はないが、墓はサンタモニカのシティーの墓地にある。宗教はキリスト教で、ホーリネス教会の信徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言、親子や家族全体では日本語を使用する。沖縄料理は好きで、ジュシー、トーガンスープ、ウドン、ソーメン、コンブをよく食する。

邦字新聞は『加州毎日』を購読し、ファーマー新聞も読む。所属団体は沖縄県人会、金武町人会に所属し、ガーデナー組合にも入っている。

模合は参加したことがない。銀行は「住友銀行」や「サンタモニカ銀行」を利用する。郷里へ送金したことはないが、戦後衣服や薬など救援物資を送ったことがある。郷里への一時帰国は戦後で、おば(母の姉)の88歳の祝いの出席も含めて3回ある。

### (3) 小橋川博

1919年(大正8)2月14日生。ロサンゼルス市で1993年9月11日に面接聞取調査。調査時74歳7か月。本部村字伊豆味653番地出身。父小橋川惣吉・母ウサ<sup>5)</sup>の4男。妻信子は1917年生で西原村出身の帰米二世。生まれたのは米国本土アリゾナ州フェニックス市で、一歳のときに沖縄へ。伊豆味尋常高等小学校を卒業し、高等科2年生まで修了。14歳まで父母に育てられた。実家は農家で畑もあり、よく手伝いさせられた。

1936年(昭和11)8月17歳のとき、ロサンゼルスに移住していた父の呼び寄せにより、単身「クーリッジ」というアメリカの船で神戸港を出発、ハワイ経由10日間でロサンゼ

ルス港に着いた。旅費はすべて父や兄弟がだしてくれた。ロサンゼルス市の港では引受人が来るまで移民官のところで3日間も留めおかれた。

渡航後、ロサンゼルスの西部郊外で、兄が住んでいたアパートハウスに引き取られた。最初の1年間はブドウつみの仕事をした。その後1年間はセロリーの収穫もした。

ロサンゼルスのオレンジカウンティでは5年間、4エーカーの土地を3人の共同経営でイチゴの栽培をした。その後、スクールボーイをしながら英語学校にも通った。

1941年10月徴兵され、テキサスの情報学校へ基礎訓練のため送られた。そこで通訳の仕事など情報を得るための任務についた。1945年4月沖縄県系二世10人が同年12月までの8か月間、沖縄の人を面接し救うため、情報収集の一員として、沖縄本島へ第一線の司令部付きで派遣された。その同僚にはトーマス・伊芸平八郎、東江盛勇、フランク・東、瀬長、レスリー比嘉、儀間の名を記憶している。戦後、ロサンゼルス市へ帰還後はガーデナー（庭園業）の仕事をし、公園の日本庭園も造った。

国籍はアメリカ合衆国である。再渡航して米本土へ渡航したときは永住の決意はなかったが、帰米二世で兵隊に入ったときからは、この国の市民としての自覚がでてきた。

兄弟姉妹は男性が8人、女性が3人で計11人である。子供は男性が3人、女性が3人で計6人である。結婚してない者もいて、孫は2人である。宅地は50フィート×150フィートあり、家屋は1,500㎡である。

仏壇はないが墓はある。宗教は郷土の祖先崇拜である。家庭での言語は夫婦は日本語を使い、親子や家族は英語を話す。沖縄料理はクーブイリチー、ウブサー、ゴーヤーが好きである。

邦字新聞は『羅府新報』を購読し、英字新聞は『ロサンゼルスタイムス』を読む。日本語のラジオを聞き、テレビを観、雑誌を読む。同郷人団体は日本人会、北米沖縄人会に所属する。趣味としてはカラオケも好きである。

模合は参加したことがない。銀行はアメリカの銀行をいくつか利用している。送金は戦前・戦後とも行った。郷里の母へ祝い金として1,000ドル送ったことがある。戦後復興救援連盟があり、郷里へ救援物資を送った。一時帰国は戦前1回、戦後1回、計2回ある。

#### (4) 小橋川次郎・ディック

1914年（大正3）11月14日生。ロサンゼルス市で1993年9月12日に面接聞取調査。調査時78歳10か月。本部村字伊豆味出身。父小橋川惣吉・母ウサ（方言名ウシ）の2男。妻澄江は長野県出身の二世。生まれたのはアメリカ合衆国アリゾナ州フェニックス市で、1921年（大正10）7歳のとき、父母、3名の兄弟で帰郷した。伊豆味尋常高等小学校を卒業し、高等科1年生修了後県立第三中学校に入学した。実家は農家でイモ・サトウキビ・コメを

作っていた。三中2年生のとき中退し、米国本土へ長兄惣助の呼び寄せで渡航した。

1931年(昭和6)16歳のとき、単身日本の船会社の「たつた丸」で日本を出発、サンフランシスコ沖に着いた。アメリカ国籍はもっていたが、兄の手配の違いにより出迎えに来てもらえなかった。そのため、移民局の取り調べを受けて留めおかれた。しかし、なんとか上陸許可がおり、サンフランシスコでは米国日本人救世軍の世話になった。

渡航後、12歳年上の兄惣助のいるアリゾナ州フェニックス市へ向かい、その地の農園に落ちついた。同市で2年間いとこの経営するトマトなど野菜作りの農園で働いた。

1933年ロサンゼルス市へ移動、サンピードロ(サンペドロ?)4街の仲宗根ホテル(屋我地村出身の仲宗根千代さん経営)で働かせてもらった。その後19歳まで、アリゾナ州でフルーツや野菜の収穫時の仕事をするブランケットボーイの仕事をした。その後、ロサンゼルス郊外のイチゴ農園で兄弟そろって働いた。

1937年から1941年までロサンゼルスの西部の郊外(西ロサンゼルス)で、弟の博や長男とともにガーデナー(庭園業)の仕事をした。

1941年12月太平洋戦争の勃発により、1942年5月ルーズベルト大統領9066号の署名により、太平洋沿岸地の日系人の立退き命令が下った。そのため、日系人はロサンゼルス九番街市場に集合させられ、その場所より順次強制収容が始まった。最初の移動先はサンタニータ競馬場の仮収容所であった。

1942年6月アイダホ州で60人のビート(サトウダイコン)の収穫時などの仕事があり、それに募集し出所できた。1946年まで同州アバディーンAbidynの農園で働き、その地で結婚し子供もできた。1948年までオレゴン州シャーウッドへ移り農業をした。1949年以降ロサンゼルス市へ移り、西ロサンゼルスの現在地で生活を送っている<sup>6)</sup>。

国籍はアメリカ合衆国である。二重国籍ではない。移民当時永住の決意はゆらいでいた。しかし、現在は子供も孫もいるので永住のつもりである。

兄弟姉妹は男性が8人、女性が3人で計11人である。子供は男性が2人、女性が1人で計3人である。孫は5人いる。家屋・宅地とも自己所有である。現在1943年に結婚した妻と2人で住んでいる。宗教は仏教で妻はキリスト教である。仏壇はなく墓は購入してある。家庭での言語は夫婦は日本語と英語を併用するが、親子・家族の場合はすべて英語である。沖縄料理は自分で作り、ゴーヤーや豚肉料理が好きである。

邦字新聞は『羅府新報』を購読し、英字新聞は『ロサンゼルスタイムス』を読む。英語放送のラジオを聞き、テレビを観る。雑誌は日本語の『中央公論』などを読んでいる。所属団体としては沖縄県人会の会長で、盆栽同好会にも入っている。

模合は参加したことがない。現地の金融機関としては「バンクオブアメリカ」や「住友銀行」を利用している。戦前・戦後とも送金は多くした。戦後郷里へ救援物資として、寄

付もし、古着なども送った。一時帰国は戦後3回以上ある。1977年には2週間郷里に滞在した。1980年代には北海道から長野県まで3週間以上も旅行をした。1993年には中国旅行も兼ねて、郷里の母のカジマヤー祝いに妻と2人で出席した。息子は小橋川ベンである。

#### (5) 沢岷安武

1928年(昭和3)9月9日生。ロサンゼルス市で1993年9月12日に面接聞取調査。調査時65歳。北谷村(現嘉手納町)字野国出身。父沢岷安喜<sup>7)</sup>・母カマドの長男。妻富子(旧姓知念)はハワイ二世で昭和6年生で父は東風平、母は糸満出身。ハワイ州マウイ島フェロで出生、6歳のとき帰郷。屋良尋常高等小学校を卒業し、高等科のときに沖縄県立農林学校へ入学した。実家は風呂屋を経営していた。自宅はカーラヤーであった。沖縄戦を宜野座村に避難して生きのび、戦後宜野座ハイスクールに通ったりして、米軍のドライバーとして1年間働いた。1949年2月20歳のとき、単身米軍の軍用船で、ハワイに移民していた父母の呼び寄せでホノルル港に着いた。

渡航後、オアフ島ホノルル市で2年間、白人の家庭に住み込み、スクールボーイをしながら、学校へ通い英語を習得した。

1951年米国本土のロサンゼルス市へ転住し、ガーデナー(庭園業)の仕事をした。以後現在までこの庭園業の職業に従事している。ガーデナーの仕事は賃金制で現金収入となり、一日10軒ほどを受けもっている。1955年に結婚した。1970年以降はロサンゼルス郊外のハンチントンビーチに住んでいる。

国籍はアメリカ合衆国である。二世であるが二重国籍ではない。再移住したときから永住のつもりであった。

兄弟姉妹は男性が5人、女性が2人で計7人である。県人会の役員で活躍している沢岷安和は弟の3男である。子供は男性が3人、女性が1人で計4人である。孫は2人いる。宗教は郷里の祖先崇拜である。仏壇も墓もある。家庭での言語は夫婦・親子・家族の会話はすべて英語である。家庭の料理はみそ汁など日本食が主体であるが、沖縄の豚肉料理は好きである。

邦字新聞は『羅府新報』を購読し、英字新聞は『ロサンゼルスタイムス』を読む。ラジオは英語を聞き、テレビは日本語・英語両方とも観る。同郷人団体には加入していない。趣味は兄弟や友人と三味線を楽しんでいる。

模合は日本人の友達25人と月1回1口200ドルに参加している。現地の金融機関も利用している。送金は戦前戦後とも行ったことはない。郷里への一時帰国は戦後1回あり、1991年に2週間滞在した。

#### (6) 大城イネ

1904年(明治37)5月10日生。ロサンゼルス市で1993年9月13日に面接聞取調査。調査時89歳4か月。羽地村字仲尾次出身。父松田清栄・母マツの長女。夫の大城清栄は明治35年生まれ、同村字真喜屋の出身。羽地尋常高等小学校を卒業し、高等科2年生まで修了した。父は羽地村役場や産業組合に勤めていた。アメリカ本土へ渡航するまで、実家の手伝いをしていた。

1924年(大正13)1月初め19歳のとき、夫の呼び寄せの形で夫といっしょに米国本土へ渡航した<sup>8)</sup>。渡航ルートは1923年(大正12)11月には神戸に滞在し冬であった。大洋丸で翌年正月すぎに神戸を出港し、サンフランシスコ港に着いた。

渡航後、サンフランシスコ市に2、3日滞在したのち、汽車でロサンゼルス市に着いた。ロサンゼルス市ボールデンパークで、1941年太平洋戦争勃発時までカリフラワーなどの野菜作りの仕事をした。1942年から1945年までの3年間、ロサンゼルス郊外のキャンプに強制収容された。1945年8月終戦後1983年まで、ロサンゼルス郊外で百姓(農業)をつづけ、子供も成長し現在に至っている。

国籍は日本である。戦前永住しようかどうかと迷っていたが、子供も大きくなり、その後永住の決意をした。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が1人で計3人である。子供は男性が3人、女性が2人で計5人である。孫は8人いる。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇はないが、墓はあり、墓参りには孫といっしょに子供が連れていってくれる。家庭での言語は夫婦・親子・家族すべて日本語である。沖縄料理は好きで、ゴーヤー・トウフ・豚肉・カツオブシをよく使う。

邦字新聞は『羅府新報』を購読している。英字新聞は読まない。日本語のラジオを聞き、テレビを観る。雑誌は日本語の『婦人倶楽部』を読む。同郷人団体は沖縄県人会、名護市民会に所属している。

模合は参加したことがない。現地の銀行も利用していない。送金は戦前に行ったことはあるが、戦後はない。戦後郷里へ救援物資として、子供用の古着などを小包で送った。一時帰国は2回ある。うち1回は1941年12月に1人で帰郷した。長年アメリカでの生活が安定しているので、移民して来てよかった。

#### (7) 伊芸カマ

1905年(明治38)8月10日生。ロサンゼルス市で1993年9月13日に面接聞取調査。調査時88歳1か月。金武村字屋嘉出身。父宜野座こうしち・母カメの2女。夫は伊芸蒲六<sup>9)</sup>で同村出身16歳年上。嘉芸尋常小学校を卒業し、1年間補習科に通っていた。実家



は農家で山に薪をとりに行ったりして手伝いをしていた。

1923年(大正12)18歳のとき、夫の呼び寄せにより、神戸港を春洋丸で出航しサンフランシスコ港に着いた。神戸では検査などのため20日間も滞在させられた。

渡航後、サンフランシスコ市からロサンゼルス市へ陸路で向かった。最初バーモントでイチゴ作りの仕事をした。ロサンゼルス市郊外で夫は漁師の仕事をし、カンヅメ工場でも働いていた。

太平洋戦争の勃発でサンタニータのキャンプに強制収容された。ついで夫はアーカンソー州のローワーセンターへ、ツールレイキへと移動し収容された。

国籍は日本である。移民当時永住の決意はなかったが、現在はある。現在日系人のための施設のリタイヤーホール(東京タワー)にお世話になっている。この施設はリトルトウキョウの中にある。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が2人で計4人である。子供は男性が3人、女性が1人で計4人である。孫は10人いる。仏壇も墓もある。宗教は仏教で西本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦・親子・家族とも日本語である。食事は日本食で肉・魚・サシミがよくでて、沖縄料理も好きである。

邦字新聞は『羅府新報』を読む。ラジオやテレビは日本語・英語とも聞いたり、観たりする。同郷人団体は日本人会、金武町人会に所属する。

模合は参加してない。現地の銀行は利用する。送金は戦前は行ったことはあるが、戦後はない。一時帰国は1964年と1992年の2回ある。

#### (8) 屋宜盛蒲

1907年(明治40)12月11日生。ロサンゼルス市で1993年9月13日に面接聞取調査。調査時85歳9か月。越来村字安慶田出身。父屋宜盛樽<sup>10)</sup>・母ツルの長男。妻はカメヨ(旧姓前田)6歳年下のハワイ二世。上地尋常小学校を卒業した。実家は農家をしていた。水田がわずかにあった。

1920年(大正9)13歳のとき、ハワイへ父の呼び寄せにより母・弟と3人で、横浜港を出航し、12、13日間かかって春洋丸でホノルル港に着いた<sup>11)</sup>。当時ハワイは金もうけのできる出稼ぎの島で、皆移民することにあこがれていた。

渡航後、マウイ島のラハイナへ行き、6年間製糖工場へ雇われ、4名でサトウキビ畑で働いた。1926年(大正15)ハワイ島のコナへ移り、綿花の栽培をする事業を1939年ごろまで行った。1940年にオアフ島へ出てきて、ホノルル市ヌアヌのスクールストリートに住み、タクシー業の仕事に従事した。

1955年米国本土のロサンゼルス市ウエストロサンゼルスへ転住した。以後65歳までガー

デナー(庭園業)の仕事をした。同地は気候も沖縄と似ていて、ウチナンチュも多く住んでいる。

国籍はアメリカ合衆国である。帰化したのは1953年ハワイにおいてタクシー事業の関係であった。移民してきた当時から永住のつもりであったが、決意したのは戦後である。

兄弟姉妹は男性が5人、女性が1人で計6人である。子供は男性のみ3人である。孫は2人いる。宅地・家屋とも自己所有で、65フィート×150フィートある。

仏壇もあり、墓も日系人用の墓地に購入した。宗教は仏教で西本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は日本語を話し、親子・家族は英語を使用する。沖縄料理はトウフ・豚肉・チキンが多く、日本食的である。

邦字新聞は『羅府新報』を購読し、英字新聞は『ロサンゼルスタイムス』を読む。日本語・英語でラジオを聞き、テレビを観る。雑誌は日本語のものを読み、妻は『主婦之友』を読んでいる。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。趣味は三線で野村流に通っている。

模合は参加していない。現地の金融機関としては「東京銀行」を利用している。送金は戦前・戦後とも親戚へ行ったことがある。戦後郷里へ救援物資を送った。郷里への一時帰国は1988年に1回あり、2か月間滞在した。また、ハワイへ帰ったときもあり、なつかしく思い出した。

## 2. サンフランシスコ市の証言事例

### (1) 当銘由盛

1954年(昭和29)10月1日生。サンフランシスコ市郊外で1993年9月24日に面接聞取調査。調査時38歳11か月。具志川市字前原21番地出身。父当銘由三郎(大正10年生)、母春子(大正12年生)の2男、妻はイギリス系白人ヘレンで2歳年下。前原高等学校を卒業し、1974年琉球大学法文学部法政学科に入学した。1979年に琉大を卒業し、塾の講師なども勤めた。実家は農家で5,000坪もあり、サトウキビを栽培し、養豚も規模が大きく、牛も飼育していた。

1981年10月1日単身羽田空港よりノースウエスト航空で、アメリカ合衆国本土に着いた。それは海外教師研修等のプログラムのオブザーバーとして、観光ビザは1年間によるものであった。

渡航後、文化の民間大使として、カリフォルニア州のニューマンで6か月ホームステイをした。1982年4月から5か月間モデストで、バプテスト教会の神父さんの家でホームステイをした。1982年9月から4年間、サンフランシスコ市内で、日本語の新聞広告により「すし源」に仕事をみつけた。しかし、同店は経営が悪化し、閉店の少し前1985年10月に離職する。

1986年4月サンフランシスコ市郊外サウスリートへ転住し、6か月間すし店をパートナー（アメリカ人）と共同経営していた。1986年10月以降「すし蘭」を経営し現在に至っている。同地域は高級住宅街で、上流階級向けのすしを提供している。

国籍は日本のままで、税金も支払い、永住権としてのグリーンカードも取得している。アメリカへ入国したときは永住の決意はなかったが、今はそのつもりである。

兄弟姉妹は男性が4人、女性が4人で計8人である。子供は女性のみ3人である。住宅は50坪の平屋のコンドミニウムに住んでいる。不動産としての土地ももっている。

仏壇や墓は所有していない。宗教はキリスト教のユニテリアン（リンカーンに由来する自由教会）である。家庭での言語はすべて英語を使用する。沖縄料理は好きで、時々自分で作る。

邦字新聞は『北米毎日』を購読している。英字新聞は『クロニカル』などを読む。英語のラジオを聞き、テレビを観る。雑誌は日本語のものを定期的に購入している。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。職業関連の所属する団体に加入し、また、地元との親睦も深めている。

模合は参加したことがない。アメリカの銀行をよく利用している。郷里へ送金したことはある。郷里への一時帰国は1991年4月に1回あり、2週間滞在した。

## (2) 酒巻裕子

1937年(昭和12)12月24日生。サンフランシスコ市で1993年9月24日に面接聞取調査。調査時55歳9か月。那覇市首里大中町1丁目20番地出身。父翁長俊郎(1901年生)・母君代(1904年生)の長女。夫は酒井アルートで日系二世。韓国京城で出生、京城第一国民学校に入学したが、太平洋戦争のため中退した。戦後家族で韓国から引き揚げてきた。父の職業の関係で小学校をいくつか通い、首里中学校、首里高等学校を卒業した。

1965年9月11日27歳のとき、単身アメリカ合衆国本土ロサンゼルス市へ航空機で渡り、その後サンフランシスコ市へ転住した。1963年には学生ビザによるスクールガールとして、ハワイ、ロスなど幅広くアメリカ社会をみてまわった。

国籍はアメリカ合衆国である。1971年に帰化した。当初は永住の意志はなかったが、現在はその決意である。1966年8月に結婚し、同居家族は夫婦とおば(父の妹)と3人である。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が2人で計5人である。子供はいない。家屋・宅地とも自己所有である。仏壇はないが、墓は日系人墓地に購入してある。夫婦・家族の言語は日本語を使用している。食事は日本食と沖縄食を併用している。

邦字新聞は『北米毎日』を購読する。英字新聞も読んでいる。ラジオは英語を聞き、テレビは日本語・英語とも観ている。雑誌は英語がおもである。同郷人団体は北加沖縄県人

会と仁風会(琉舞・三味線など沖縄の文化芸能の団体)に所属する。

模合は月1回1口100ドルの女性友人9人組に参加している。現地の金融機関は「ユニオンバンク(東京銀行)」「サンフランシスコフェデル」「バンクオブアメリカ」を利用している。送金を行ったことがある。郷里への一時帰国は合計8回ある。ハワイへの研修をきっかけに米国へ来てから30年目となるが、移民してきてよかった。

### (3) 東(ひがし)・フランク・盛勇

1918年(大正7)8月24日生。サンフランシスコ市郊外サニーベル市で1993年9月25日に面接聞取調査。調査時75歳1か月。名護町字東江65番地出身。父東江盛長・母カマドの2男。妻は鹿児島県出身、1947年に結婚。ロサンゼルス市で出生。1921年3歳のとき父母とともに帰国。名護尋常高等学校を卒業し、県立第三中学校へ入学した。三中を3年修了したところで、おば(父の妹)が住んでいた宮崎県の都城中学校へ転校した。同校で4、5年生を修了し、1936年(昭和11)に卒業した。学資は父が送ってくれた。父は1904年(明治37)の初回県からのメキシコ移民で、その後米国本土へ渡り出稼ぎ移民の成功者であった<sup>12)</sup>。実家は土地を所有する農家であった。

1937年(昭和12)10月19歳のとき、サンフランシスコ在住のおじの呼び寄せで、単身日本郵船の大洋丸で神戸港より出航した。航海のルートはハワイへ寄港し、13、14日間でサンフランシスコ港に到着した。エンゼルアイランドの移民局で税関などの検査を受け、おば(大兼久ウシ)が迎えにくるまで待たされた。

渡航後、1年半サンフランシスコ市北東のサクラメント市のおばのところで、イチゴ栽培など農業の仕事をした。1939年から半年間中部カリフォルニア州のデラノで、ピーなど野菜栽培の農業をした。1939年から2年間日系人の多いウエストロサンゼルスでガーデナー(庭園業)の仕事をした。

太平洋戦争が勃発し、1941年10月23歳のとき、ロサンゼルス郊外のフォートスカッサーに、徴兵されて入隊した。同年12月にはイリノイ州の衛生隊にまわされ、1942年には日系兵士としてテキサス州キャリフィールドの航空隊に配属された。1943年から1年間メキシコ国境近くのモーフィールドで、衛生隊に所属した。

1944年2月以降日系人の情報兵のグループとして、テキサス州フォートサムヒューストンへ配属された。その後、ミネソタ州のキャンプサーベジへ移動したが、その時の教官が阿嘉レイモンド氏であった。1944年12月以後アラバマ州フォートマクラーレンで、日系人として歩兵の基礎訓練を受けた。

1945年1月キャンプサーベジで、太平洋戦争中の現地沖縄へ派遣するため、日系人10人が3チームに分けられた。一つは日本語・沖縄方言を話せる通訳と、もう一つは日本語・

英語の話せる通訳、いま一つは日本語・英語の通訳専門の組であった。

この日系人班のチームリーダーはハワイ大学教授のトーマス・平八郎・伊芸であった。チームオフィサーはリターンレン・アミオカで、ハワイの日系人8人と米国本土の日系人2人で成り立っていた。

米軍は1945年（昭和20）4月1日沖縄本島へ上陸した。同年4月28、29日には浦添村の城間・嘉数の戦闘となった。1945年6月後方部隊へ配属となった。本島本部の日本軍の掃討作戦のため、宇土部隊と対峙することになった。田井等の収容所で食料さがしに来ていた村人が、もとアメリカにいた父と自分の弟が1人ケガしていると教えてくれたと上官が話した。その弟（東江康治）をすぐ海軍の診療所に連れていき入院させた。同年6月23日には終戦となった。

1947年に除隊となった。1948年11月以降ロサンゼルスに住んだ。1953年1月以降現在のサニーベル市へ移り、イチゴ栽培などの農業をした。1955年からはガーデナー（庭園業）の仕事をしている。

国籍はアメリカ合衆国である。兄弟姉妹は男性が7人、女性が2人で計9人である。子供は男性が2人、女性が2人で計4人である。孫は2人いる。仏壇はないが、墓は20マイル離れた場所にある。宗教はキリスト教のプロテスタントである。家庭での言語は夫婦は日本語、親子・家族は英語を使用する。沖縄料理は好きで時々作る。

邦字新聞は『日米時事』を購読する。英字新聞も読む。ラジオは日本語、英語とも聞き、テレビは英語のものを観る。雑誌は英語がおもである。同郷人団体は沖縄県人会に入っている。退役軍人会にも所属する。

模合は参加したことがない。現地の銀行は「住友銀行」やアメリカの銀行を利用する。送金は戦前・戦後とも行った。戦後郷里へ救援物資を送った。一時帰国は1990年の「第1回世界のウチナーンチュ大会」を含めて計3回ある。

#### (4) 山田八重子

1924年（大正13）9月12日生。サンフランシスコ市郊外で1993年9月25日に面接聞取調査。調査時69歳。那覇市崇元寺町出身。父久高将旺・母ツルの3女。夫山田・ジョージ・義一はアメリカ二世、父義守は那覇市崇元寺町出身、歯科医師。八重山郡石垣町で出生。父が台湾へ移住していたため、7歳から11歳まで台湾のあさひ小学校へ通っていた。那覇市松山にあった沖縄県立第二高女へも入学した。戦争中は日本本土の熊本県・福岡県に疎開した。父是那覇市で久高歯科医院を開業していた。

1954年（昭和29）2月29歳のとき、夫の呼び寄せで長男と長女をつれて3人、ネルソン号で横浜港を出航し、2週間でサンフランシスコ港に着いた。

北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究  
—アメリカ合衆国本土・カナダ一世移民の現地調査事例を中心に(Ⅲ)— (石川友紀)

渡航後、6年間オークランド市で、ジャパンフードの仕事をした。1960年オークランド市近くのピードモントへ移り、27年間アメリカの銀行「シティーバンク」で働いた。

国籍はアメリカ合衆国である。1957年に帰化した。移民当時は永住のつもりはなかったが、子供が成長したのちに決意した。

兄弟姉妹は男性が3人、女性が3人で計6人である。子供は男性が2人、女性が2人で計4人である。孫はまだみてない。仏壇はないが墓はある。宗教は神道系の「生長の家」である。家庭での言語は夫婦は日本語、親子や家族の場合は英語を使用する。沖縄料理はチャンプルー、クーブイリチーなどよく作り、長男や長女が好きである。また、ゴーヤー、キュウリ、トマトもよく使用している。

邦字新聞は『日米タイムス』を購読し、英字新聞も読む。ラジオ・テレビは日本語の番組をよく聞き、観る。雑誌も日本語のものを読む。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。夫はゴルフクラブに入会している。

模合は参加したことがない。銀行はアメリカの銀行をよく利用する。郷里への送金はしたことがない。戦後救援物資を送ったことはある。一時帰国は1988年を含めて計5回ある。

#### (5) 阿嘉・レイモンド・良弘

1915年(大正4)12月13日生。サンフランシスコ市郊外ウォルナットで1993年9月27日に面接聞取調査。調査時77歳9か月。首里市汀良町2丁目27番地出身。父阿嘉良整・母ナへの2男。妻は静子、旧姓呉屋、アメリカ二世。ハワイ州マウイ島ワイカップで出生。父がハワイ移民(1906年渡航)<sup>13)</sup>で、同地で10歳まで育った。1925年父母と兄弟全員郷里へ一時帰国した。首里第一尋常高等小学校を卒業、同高等科1年生のとき、県立第一中学校へ入学、1934年(昭和9)3月に卒業した。

アメリカ合衆国のハワイや本土に渡航後、1943年6月ミネソタ州の陸軍情報学校の教官となった。ミネソタ大学やミシガン大学で、情報学校の将校扱いの教官として、日系人に専門語を教えた。1945年8月太平洋戦争終結のときまでその任務についていた。

1946年以降、GHQの日本連絡部へ、1947年以後同終戦連絡事務所へ配属され、東京勤務となった。GHQは1952年まで存続し、民政局の勤務となり、その後民事局に移った。1986年(昭和61)11月3日には日本政府より、勲三等旭日中授章の勲章を受賞した。

国籍はアメリカ合衆国である。永住の決意は戦前・戦後ともあり変わらなかった。

兄弟姉妹は男性が4人、女性が2人で計6人である。長男阿嘉良雄はハワイに住んで健在である。1943年6月シカゴ赴任中に結婚した。現在同居しているのは妻と2人で、子供はいない。家屋はゴルフ場の敷地内にあり、約50坪の1戸建て住宅で、庭つきである。仏壇や墓は所有してない。家庭での言語はすべて英語である。沖縄料理はクーブイリチー

などが好物である。

邦字新聞は『ハワイパシフィックプレス』を購読している。英字新聞は『ハワイヘラルド』を読む。ラジオは英語で聞き、テレビは英語とともにNHKのニュースなどは日本語のものを観る。雑誌は日本語のものをおもに読む。

模合は参加していない。銀行は「バンクオブアメリカ」を利用する。送金は戦前・戦後とも行ったことはない。郷里への救援物資も送ったことがない。郷里への一時帰国は1989年と1992年の2回ある。

#### (6) 藤岡（玉城）貞子

1906年（明治39）2月15日生。サンフランシスコ市で1993年9月28日に面接聞取調査。調査時87歳7か月。首里市赤田町出身。父玉城亀一・母ツルの長女。夫は藤岡達夫、明治39年生、山口県出身の二世。首里尋常小学校を卒業、県立第一高女を卒業した。実家は泡盛工場がある酒屋であった。

1922年（大正11）16歳のとき、単身父母の呼び寄せで米国本土へ渡航した。サイベリア号で横浜港を出航し、途中おじ（父の兄）のいるハワイに一泊し、2週間目に同年5月25日にサンフランシスコ港に到着した。

渡航後、サンフランシスコ市の日本人街で、父の弟が経営する「ふじホテル」に滞在、同市で以後住みつけた。太平洋戦争中もホテル経営を行っていた。

国籍はアメリカ合衆国である。1950年代に帰化した。移民してきた当時から永住のつもりであった。

兄弟姉妹は男性が4人、女性が3人で計7人である。子供は女性が1人である。孫は3人いる。家屋は自己所有である。仏壇は日本様式のものがあり、墓もある。宗教は仏教で浄土宗の信徒である。家庭での言語は夫婦は日本語で話し、親子・家族の場合は英語を使用する。沖縄料理は好きで、ナカミやみそ汁をよく作った。

邦字新聞は『北米毎日』を購読している。英字新聞は『クロニカル』を読む。ラジオはあまり聞かず、テレビは日本語・英語両方のものを観る。雑誌は日本語のものを、また文庫本の推理小説なども読む。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。趣味の団体としては週1回（水曜日）バスが送り迎えしてくれるハミルトンシニアセンターへ通っている。

模合は参加してない。現地の銀行はよく利用する。送金は戦前・戦後とも行ったことがない。戦後郷里へ救援物資を送った。一時帰国は1929年を含めて4回ある。

#### (7) 塚本（大工廻）メアリー・鶴子

1915年（大正4）1月17日生。サンフランシスコ市で1993年9月28日に面接聞取調査。

調査時 78 歳 8 か月。首里市崎山町出身。父大工廻朝精 (1887 年生)<sup>14)</sup>・母カメ (1884 年生)<sup>15)</sup> の 3 女。夫は塚本・アルフレッド・イワオで 1912 年生, アメリカ二世, 両親は広島県出身。

生まれたのはアメリカ合衆国カリフォルニア州フローリンで, 1933 年エルクグローブ・ハイスクールを卒業。1 年生と 2 年生のとき学業成績最優等生として表彰された。同年パシフィック大学に入学。1936 年 4 年生のとき, 持病の関節炎のため大学を中退す。同年 11 月 22 日に結婚。

1941 年 12 月 7 日日本軍がハワイの真珠湾を空襲し, 太平洋戦争が勃発した。1942 年 4 月日系市民協会フローリン支部の秘書として採用される。日系人の外出は禁止されていた。同年 5 月 29 日日系人だという理由だけで, 彼女たちはフレズノ集結センターへ強制収容される。同年 10 月 14 日フレズノから 5 昼夜も列車にゆられてアーカンソー州ジェローム強制収容所に到着した。1943 年 3 月ミシシッピ州ジャクソンでのリーダー研修会に出席するため, 初めて 1 週間収容所の外に出る。

戦後, 1949 年秋以降教職につき教員生活を開始し, 1976 年 6 月まで 26 年間にわたり勤めた。1977 年ジャンケンボン学校の父母会に, 附属の言語文化学校の理事長を委嘱される。1991 年 7 月からメアリーツカモト小学校の建設を開始し, 1992 年 8 月に完成し, 10 月に開校した。

兄弟姉妹は男性が 1 人, 女性が 6 人で計 7 人である。子供は男性が 1 人, 女性が 1 人で計 2 人である。現在は夫と 2 人の生活である。

仏壇はないが, 墓はある。宗教はキリスト教でメソジスト教会の信徒である。家庭での言語は夫婦は日本語, 親子は英語, 家族は日本語を話す。沖縄料理は母がよく作ったが, アシテイビチやポーク, みそ汁であった。

邦字新聞は『日米時事』を購読する。英字新聞の『エルグロブシティズン』や『サクラメントビュー』も読む。所属団体としては, 地元フローリンのフローリン市民協会や教師のグループにも加入している。日系人の歴史を掘り起こす研究会にも参加している。

### Ⅲ. カナダ一世移民の現地調査事例

#### 1. レスブリッジ市の証言事例

##### (1) 比嘉栄子

1922 年 (大正 11) 3 月 14 日生。レスブリッジ市で 1993 年 9 月 17 日に面接聞取調査。調査時 71 歳 6 か月。与那城村字平安座出身。父金城安太郎・母カミの長女。夫は比嘉秀長<sup>16)</sup>, 読谷村大湾出身, 1904 年生。

生まれたのはカナダのバレークーバー市で, バンクーバーの小学校を卒業した。日本語学校にも通った。同地で太平洋戦争が勃発した 20 歳まで住んでいた。戦争中は内陸へ移



動させられた。

1942年レスブリッジ市へ家族全員強制移動させられ、男性はキャンプに収容された。仕事は白人経営の砂糖大根を収穫するなどであった。

戦後1945年以降夫はレスブリッジ市のハーリービューの炭鉱地で働くようになった。1960年以後はオフィスで働き、1970年に引退した。1983年以降はレスブリッジ市の現在地に移住し、夫は今年89歳で亡くなった。

国籍はカナダである。兄弟姉妹は男性が5人、女性が4人で計9人である。子供は男性が3人、女性が1人で計4人である。孫は5人いる。家屋は自己所有である。

仏壇も墓もある。宗教は仏教で西本願寺の信徒である。家庭での言語は夫婦は日本語で話し、親子・家族は英語を使用する。沖縄料理は好きではあるが、あまり作らない。

邦字新聞は『ニューカナディアン』を読む。また、西本願寺の出版物も読んでいる。ラジオは英語のものを聞き、テレビは日本語・英語両方のものを観る。雑誌も英語である。同郷人団体はレスブリッジ沖縄クラブに所属する。2男がその会長を務めている。

模合は参加していない。カナダの銀行を利用する。送金は戦前に行ったことはあるが、戦後はない。郷里への救援物資を送ったことがある。一時帰国は1976年(2か月滞在)、1979年(3週間)、1985年(3週間)の3回ある。

## (2) 比嘉トミ

1902年(明治35)5月21日生。レスブリッジ市で1993年9月17日に面接聞取調査。調査時91歳4か月。中城村字萩道出身。父新垣□□・母□□の長女。夫は比嘉松で中城村字久場出身、明治27年生。母方の実家で育ち、中城尋常小学校を卒業した。農業の手伝いをしていた。

1927年(昭和2)9月25歳のとき、夫の呼び寄せにより、家族3人日本郵船会社の「かが丸」で日本を出発、カナダへ着いた。

渡航後、バンクーバー市で夫はメールという木材会社で働いた。その後、スターリンへ転住し6年経過したら太平洋戦争が勃発した。戦後はレスブリッジ市テーバーに移り住み、現在に至っている。

国籍はカナダである。1948年8月に帰化した。移民当時は永住の意志はなかったが、現在はそのつもりである。現在1人住まいである。13年前までは畑(アタイグアー)仕事もしていた。

兄弟姉妹は妹が1人いて、計2人である。結婚したのは18歳のときである。子供は男性が3人、女性が3人で計6人である。孫が22人、ひ孫が25人いる。

仏壇も墓もある。宗教は祖先崇拜である。家庭での言語はすべて日本語を使用している。

沖縄料理は好きでよく作る。たとえば、材料は豚肉・チキン・ゴーヤー・ゴボウなどである。

邦字新聞は地元の『ニューカナディアン』を読む。ラジオは英語のものを聞き、テレビも英語のものを観る。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。

模合は参加したことがない。銀行も利用しない。送金は戦前行ったことがある。郷里へ戦後救援物資を送った。一時帰国は1970年に1回あり、その時は2か月間滞在した。

### (3) 浦崎政吉

1938年(昭和13)11月25日生。レスブリッジ市で1993年9月18日に面接聞取調査。調査時54歳10か月。読谷村字親志44番地出身。父浦崎政夫・母ヨシの長男。妻はシズ子、旧姓吉山、同字出身。実家は農家でトウフヤーであった。読谷高校を卒業した。8年間米軍関係の仕事に従事した。国際大学・日本大学にも通った。1971年から1年半琉球新報社にも勤めた。

1972年11月34歳のとき、国際協力事業団取り扱いの移民で、家族5人カナダへ渡航した。当時復帰時のきびしい状況のため、海外へ出て働くことを考えた。航空機で羽田—バンクーバー—カルガリーを経由してレスブリッジに着いた。呼び寄せたのは吉山一男であった。

渡航後、レスブリッジ市で1年間カナダ人経営のキャンピングカー製造会社で働いた。以後同地で1973年から2年半トラックなど自動車の車体を溶接する会社に勤めた。1977年からは別の会社の溶接工の仕事をした。その工場は臨時工を含めると60人もの従業員がいた。1984年8月レスブリッジ市に住宅を購入し現在に至っている。

国籍はカナダである。1978年に帰化した。移民当時から永住の決意であった。

兄弟姉妹は男性が6人、女性が3人で計9人である。子供は男性が2人、女性が1人で計3人である。住宅内には家屋と倉庫があり、自己所有である。

仏壇はなく、墓もない。宗教は祖先崇拜である。家庭での言語はすべて日本語である。沖縄料理は好きで、アシテビチ・牛肉・トウフ・ゴーヤー・サツマアゲをよく食べる。

邦字新聞は『日加タイムス』『ニューカナディアン』『バンクーバー新報』を購読している。英字新聞は『レスブリッジヘラルド』を読む。ラジオは英語のものを聞き、テレビも英語のものを観る。雑誌は日本語の『文芸春秋』などを読んでいる。同郷人団体はレスブリッジ沖縄県人会(クラブ)、日系人協会、日系合同教会に所属している。

模合は5、6年前まではあったが、現在はしてない。かつて12家族で1口50ドル(カナダドル)で毎月1回各家庭をまわって行っていた。カナダの銀行を利用する。送金は母へ行ったことがある。郷里への一時帰国は1987年・1990年・1992年の3回ある。1990年8月の「第一回世界のウチナーンチュ大会」には民間大使として招待された。

## 2. バンクーバー市の証言事例

### (1) 島袋ナベ

1894年(明治27)11月11日生。バンクーバー市で1993年9月20日面接聞取調査。調査時98歳10か月。国頭村字安波11番地出身。父當山加那・母ウトの3女。夫は島袋加那<sup>17)</sup>で勝連町字比嘉88番地、カナダ移民。安波尋常小学校の4年制を卒業した。安波の集落は山あり、海ありで天然資源は恵まれていた。実家は農業であった。

1920年(大正9)26歳のとき、夫の呼び寄せでカナダへ移民した<sup>18)</sup>。夫がハーデビューの炭鉱で働いていたので、戦前から戦後もずっとレスブリッジに住んでいた。

1958年家族で郷里の勝連町浜比嘉島へ帰った。1962年ごろレスブリッジに戻り、子供たちといっしょに、ポテト・トウモロコシ・マメ・サトウダイコンを借地して作っていた。

ブリティッシュコロンビア州に移り、2男が製材を行う材木会社に勤めた。1968年ごろ同州のバンクーバー市へ移り住み、現在に至っている。

国籍はカナダである。1973年に帰化した。移民してきた当時から永住の決意であった。現在2男の家族と3人で生活している。

兄弟姉妹は男性が5人、女性が5人で計10人である。健在なのは自分1人だけである。子供は男性が3人、女性が2人で計5人である。孫・ひ孫数は不明。宅地は33フィート×110フィートあり、家屋とともに自己所有である。不動産の貸家ももっている。

仏壇も墓もある。宗教は仏教で浄土真宗の門徒である。家庭での言語は夫婦は沖縄方言で話し、親子・家族は日本語を使用する。沖縄料理はチャンプルーが好きで、ダイコンなどもよく使う。

邦字新聞は仏教関係のものを読んでいる。ラジオは英語のものを聞き、テレビでは毎日3時間週3回日本語のものを観る。同郷人団体は沖縄県人会に所属する。

模合は参加してない。銀行も利用してない。送金は戦前・戦後とも行ったことはない。一時帰国は14、15回もある。元気なときは1年ごとに浜比嘉島へ兄弟姉妹に会いに帰っていた。

### (2) 宮城 弘

1939年(昭和14)8月18日生。バンクーバー市で1993年9月21日に面接聞取調査。調査時54歳1か月。屋我地村字済井出173番地出身。父宮城亀蔵・母カメの4男。妻は正美、旧姓伊芸、宜野座村字惣慶出身、1939年生。

実家は水田ではコメを、畑ではサトウキビ・サツマイモを栽培する農家であった。屋我地小学校卒業し、長兄をたよって那覇市大道に出て、真和志中学校を卒業した。ついで、

那覇商業高校を卒業した。1958年から10年間民間のタバコ会社「オリエンタル」で働いた。1968年以後知花生コン部、ミリオン商事部で、棚原氏、奥間氏経営の会社で働いた。

1970年12月31歳のとき、前記会社の企業移民として、先発していた奥間氏の呼び寄せにより、4人のメンバーでカナダへ渡航した。旅費は会社がもち、大阪経由の航空機でバンクーバー市に着いた。

渡航後、バンクーバー市ブルームスタで6か月間、安里・仲宗根・宮里諸氏とともにモーテルで宿泊していた。1971年以降バンクーバー市郊外に移り1年間、5エーカーの土地でガーデニングの仕事をした。1973年から5年間別の場所に移り、10エーカーの土地でスイセン栽培などの農業をした。

1978年から現在に至るまでの15年間、ブリティッシュコロンビア州ブラドナーでグリーンハウスをもつ30エーカーの土地で花卉栽培の農業をしている。常雇いを4人おき、スターチ・アスタ・スイセンなど季節ごとに異なる花を出荷している。

国籍はカナダである。1973年に帰化した。移民当時は3年間働いたら帰国のつもりであったが、子供たちが成長した1976年ごろから永住の決意を固めた。

兄弟姉妹は男性が4人、女性が4人で計8人である。1963年に結婚し、子供は男性が2人、女性が1人で計3人である。孫は2人いる。宅地は2階建ての家屋とともに自己所有である。不動産として30エーカー以上の土地がある。

仏壇や墓はない。宗教は仏教で浄土真宗の門徒である。その寺で日系人関係の行事がよくある。家庭での言語はすべて日本語を使用している。沖縄料理は好きで、アシティビチ・ゴヤー・ヘチマ・シブイ(トウガン)をよく食べる。

邦字新聞は週1回の『バンクーバー新報』を購読している。英字新聞はあまり読まない。ラジオは英語のものを聞き、テレビは英語とケーブルテレビの日本語のものを観る。雑誌は日本語で『文芸春秋』などを読む。同郷人団体はバンクーバーの沖縄県人友愛会と日系人協会に所属している。現地の職業関連の団体にも加入している。

模合は参加していない。銀行はカナダの銀行をよく利用する。送金を行ったことがない。郷里への一時帰国は1977年、1983年、1990年の3回ある。1990年は県主催の「第一回世界のウチナンチュ大会」にカナダ・バンクーバーの県人会長として民間大使に選ばれ招待された。

### (3) 仲本兼勝

1937年(昭和12)8月12日生。バンクーバー市で1993年9月21日に面接聞取調査。調査時56歳1か月。沖縄市(旧コザ市)字諸見里476番地出身。父仲本兼盛・母マサ子の2男。妻は久美子、旧姓仲里、大宜味村字塩屋出身、昭和20年生。

生まれたのは兵庫県尼崎市で8歳まで育ち、その後沖縄県へ引き揚げ、本部町字大浜へ転住した。本部中学校を卒業する。その後コザ市へ出て1年間、親戚の運送会社のドライバーを勤める。また軍作業の仕事も4年間勤めた。ついで7、8年間棚原氏経営の知花バッチプラントの生コン会社に就職した。

1970年11月32歳のとき単身那覇空港からチャイナエアライン（CAT）でカナダのバンクーバー市に到着した。移民の動機は生コン会社の社長が南米よりはカナダでの起業がよいとのことで、生コン事業部ごと職員を旅費と会社もちで移民することになったからである。

渡航後2年間フィールドインダストリーで鉄鋼の旋盤工として働いた。その後タインダストリーで旋盤工として働き、土日の休日には住宅地のあるブラデナーで5エーカーの農場でイチゴやキク栽培、また、垣根にするカイズカイブキなどの木も育てる農業をしている。

国籍は日本である。日本のパスポートで身分は通用し、カナダ人としての選挙権はないが、仕事があれば住める。移民して来た当時から永住の決意はあった。

兄弟姉妹は男性が2人、女性が3人で計5人である。1971年に結婚し、子供は男性が2人、女性が2人で計4人である。土地は自己所有で、5エーカーの中に宅地があり、家屋は40フィート×20フィートの2階建てである。

仏壇・墓はない。台所に「火の神」はおいてある。宗教は仏教で日系仏教会（東本願寺派）の信徒である。家庭での言語は夫婦は日本語で話し、親子・家族は英語を使用する。沖縄料理は好きで、アシティビチ・ナカミ・ゴーヤーチャンプルーなど、チャイナタウンに行けば食材はなんでも手に入る。食事は和食中心で魚が多い。

邦字新聞は『バンクーバー新報』を購読する。英字新聞も読む。ラジオは英語のものを聞き、テレビは英語のものと、日本語のNHKのものを観る。雑誌は日本語の『健康』と『主婦と生活』を購読している。同郷人団体は沖縄県人会（友愛会）と妻は日系人の女性の会に加入している。

模合は沖縄県人間で、10～12人の1か月100カナダドル出資のものに入っている。これは親睦のためである。送金したことはないが、物資はよく送った。郷里への一時帰国は2回ある。1回目の1975年には海洋博の見学を兼ね1か月間滞在した。2回目の1988年には妻と2女をつれ1か月間実家に帰った。カナダに移民して来てよかった。忙しい毎日を送っていても、親戚づきあいなどがなかったため、自分の自由な時間もてる。

#### IV. おわりに

以上、「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」という大きなテーマの一

環として、本稿はその3回目にあたり、「アメリカ合衆国本土・カナダ一世移民の現地調査事例を中心に(Ⅲ)」の副題のもと、1993年9月に面接聞き取り調査を行った一世移民(一部「帰米二世」を含む)21名を、以下の順序で記述してきた。

アメリカ合衆国本土における一世移民の現地調査の証言事例としては、カリフォルニア州のロサンゼルス市で8名、サンフランシスコ市で7名、合計15名を取り上げた。カナダにおける一世移民の現地調査の証言事例としては、アルバータ州のレスブリッジ市で3名、ブリティッシュコロンビア州のバンクーバー市で3名、合計6名を取り上げた。

現在、海外に在住する日系人は300万人以上と推計される。しかし、日本政府は1993年(平成5)までの出移民を最後の移民とみなし、その後は海外への移民の窓口を閉ざしてしまった。そのため、海外在住の日系人のうち一世は、第二次世界大戦前に渡航した者はもちろん、戦後渡航者もその数は非常に少なくなっている。世界的に高齢化が進み、海外在住の日系人の高齢者も多くみられるようになったが、一世移民の健在者は激減している状況にある。本プロジェクトの調査時までには、沖縄県出身一世移民が長寿で、健康な方々が数多くみられた。その結果、かれらの貴重な証言が得られた。改めて、証言者を始め、ご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げる。

今後の課題としては、一世にルーツをもつ二世や三世に関する移民研究と、多様性をもつ戦後移民についての歴史地理学的研究の推進が挙げられる。今後若手移民研究者の輩出を期待したい。

## 注

- 1) 琉球大学法文学部地理学教室により、以下の報告書が刊行され、その関連論文等も多数ある。『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究』第1次調査(研究代表者琉球大学田里友哲教授、1981年刊)、『同上(Ⅱ)—ボリビア・ブラジル—』第2次調査(同中山 満教授、1986年刊)、『同上(Ⅲ)—アルゼンチン・ペルー—』第3次調査(同中山 満教授、1990年刊)、『旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究』(研究代表者石川友紀教授、2004年刊)。
- 2) 石川友紀(2013)「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究—ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に(Ⅰ)—」『移民研究』第9号、pp.41-62、沖縄移民研究センター、同(2015)「同上(Ⅱ)」『移民研究』第10号、p.43-68、同センター。
- 3) 資料の出所は沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室(2005)『沖縄県史』資料編19、近代6、自由移民名簿、沖縄県教育委員会、pp.221である。
- 4) 資料の出所は沖縄県公文書館史料編集室(1999)『沖縄県史』資料編8、近代2、自由移民名簿、沖縄県教育委員会、p.359である。なお、金武町史編さん委員会(1996)『金

武町史』第1巻，移民・証言編，金武町教育委員会，pp.56-58 に伊芸丹一郎の聞取調査の証言がみられる。

- 5) 小橋川次郎・博兄弟の父母が米国本土移民として渡航した経緯については、注4)の『沖縄県史』資料編8，近代2，自由移民名簿のp.261で以下の情報がえられた。父小橋川惣吉は戸主で，国頭郡本部村字伊豆味653番地に本籍があり，24歳9か月のとき，北米へ再渡航している。旅券は大正2年8月23日に下付されている。また，母小橋川ウサは戸主惣吉妻で，15歳11か月のとき，北米へ夫と同行している。なお，惣吉は米国本土へ渡航以前にメキシコへの県初回の移民であったことが，つぎの資料により判明した。沖縄県立図書館史料編集室（1992）『沖縄県史料』近代5，移民名簿I，沖縄県教育委員会のp.25によると，小橋川惣吉は平民農，戸主で，国頭郡本部間切伊豆味村33番地に本籍があり，25歳10か月のとき，3年契約の農鋳業の目的でメキシコへ渡航している。旅券は沖縄県庁から明治37年6月20日に下付され，同年7月6日に渡航している。
- 6) 小橋川次郎の詳細な伝記は小橋川ディック次郎著（1999）『ひとめぼれ—日系アメリカ人・小橋川ファミリーの20世紀—』「ひとめぼれ」刊行会（私家版）を参照。もう1人の弟小橋川秀男についての伝記は，沖縄県編・下嶋哲朗ほか執筆（2000）『帰米二世画家小橋川秀男—永久少年の夢と生涯』バグハウスを参照。
- 7) 注3)の『沖縄県史』資料編19，近代6，自由移民名簿のp.36によると，父と思える沢岷安貴は安心長男で，中部郡北谷村字野国1453番地に本籍があり，24歳2か月のとき，妻カマ21歳6か月を同行し，ハワイへ再渡航している。旅券は大正10年7月1日に下付されている。また，注4)の『沖縄県史』資料編8，近代2，自由移民名簿のp.296によると，沢岷安貴は戸主安心長男で，中頭郡北谷村字野里1453番地に本籍があり，16歳6か月のとき，父の呼び寄せにより布哇へ渡航している。旅券は大正2年12月4日に下付されている。
- 8) 注3)の『沖縄県史』資料編19，近代2，自由移民名簿のp.167によると，夫大城清栄は戸主清平長男で，国頭郡羽地村字真喜屋442番地の1に本籍があり，21歳4か月のとき，北米合衆国へ再渡航している。旅券は大正12年11月26日に下付されている。大城イネは清栄の妻で，19歳7か月のとき，北米合衆国へ夫と同行している。
- 9) 注5)の『沖縄県史料』近代5，移民名簿Iのp.339によると，夫伊芸蒲六は平民農，戸主平蔵孫で，国頭郡金武間切屋嘉村1263番地に本籍があり，18歳のとき，満3年契約の農業労働の目的で布哇へ渡航している。旅券は沖縄県庁より明治39年9月20日に下付され，同年12月26日に渡航している。
- 10) 注4)の『沖縄県史』資料編8，近代2，自由移民名簿のp.682によると，父屋宜盛樽は戸主盛成弟で，中頭郡越来村字安慶田366番地に本籍があり，34歳3か月のとき，米領布哇へ再渡航している。旅券は大正8年12月10日に下付されている。

- 11) 注4)の『沖縄県史』資料編8, 近代2, 自由移民名簿のp.714によると, 屋宜盛蒲は戸主盛樽長男で, 中頭郡越來村字安慶田378番地に本籍があり, 12歳6か月のとき, 父の呼び寄せにより布哇へ渡航している。旅券は大正9年6月29日に下付されている。
- 12) 注5)の『沖縄県史料』近代5, 移民名簿Iのp.24によると, 父東江盛長は平民農, 戸主盛元長男で, 国頭郡羽地間切名護村199番地に本籍があり, 23歳2か月のとき, 3年契約の農鋤業の目的でメキシコへ渡航している。旅券は沖縄県庁から明治37年6月20日に下付され, 同年7月6日に渡航している。また, 注4)の『沖縄県史』資料編8, 近代2, 自由移民名簿のp.359によると, 東江盛長は戸主盛元長男で, 国頭郡名護村字名護199番地に本籍があり, 33歳6か月のとき, 北米(米国本土)へ再渡航している。旅券は大正3年11月28日に下付されている。
- 13) 沖縄県立図書館史料編集室(1994)『沖縄県史料』近代6, 移民名簿II, 沖縄県教育委員会のp.121によると, 父阿嘉良整は士族, 良芳2男で, 首里区字汀志良次村1269番地に本籍があり, 生年月日は明治20年7月10日生, 農業の目的で布哇へ渡航している。沖縄県庁から明治39年12月18日に旅券が下付され, 明治植民合資会社の取り扱いにより自由移民として, 明治40年1月中に渡航している。また, 注3)の『沖縄県史』資料編19, 近代6, 自由移民名簿のp.330によると, 阿嘉良整は戸主良芳2男で, 首里市汀良町1丁目27番地に本籍があり, 38歳6か月のとき, 布哇へ再渡航している。旅券は大正14年12月26日に下付されている。
- 14) 注5)の『沖縄県史料』近代5, 移民名簿Iのp.140によると, 父大工廻樽(のち朝清と同一人物と思われる)は士族, 戸主朝桂3男で生年月日は明治19年4月14日生, 首里区崎山1897番地に本籍があり, 農業に従事する目的で布哇(ハワイ)へ渡航している。旅券は沖縄県庁より明治38年11月25日に下付され, 同年12月12日に皇国殖民株式会社の手続きにより渡航している。
- 15) 注4)の『沖縄県史』資料編8, 近代2, 自由移民名簿のp.123によると, 母大工廻カメは戸主朝信弟朝精妻で, 首里区字崎山1897番地に本籍があり, 生年月日は明治25年8月5日生, 夫の呼び寄せにより, 洗濯業従事のため北米合衆国へ渡航している。旅券は沖縄県庁より明治45年3月2日に下付されている。なお, 娘の塚本(大工廻)メアリー・鶴子の伝記(原典は英文)がつぎのとおり出版されていて, 本稿の証言記録は同書も参考にした。メアリー・ツカモト, エリザベス・ピンカートン著, 宇久眞雄・垣花豊順・與儀憲徳・赤嶺健治・島袋善光訳(2001)『アメリカを動かした日系女性—第二次世界大戦中の強制収容と日系人のたたかい—』琉球新報社。
- 16) 注4)の『沖縄県史』資料編8, 近代2, 自由移民名簿のp.715によると, 夫比嘉秀長は戸主秀識長男で, 中頭郡読谷山村字伊良皆長田17番地に本籍があり, 15歳4か月のとき, 父の呼び寄せにより加奈陀(カナダ)へ渡航している。旅券は大正9年4月23日に下付されている。



- 17) 注13)の『沖縄県史料』近代6, 移民名簿Ⅱのp.393によると, 夫島袋加那は平民農, 戸主で, 生年月日は明治19年4月15日生, 中頭郡勝連間切比嘉村88番地に本籍があり, 3年契約の鉄道工夫の目的で, 東洋移民会社の取り扱いにより加奈陀(カナダ)へ渡航している。旅券は沖縄県庁から明治40年7月31日に下付され, 日本を同年8月21日に出発している。
- 18) 注4)の『沖縄県史』資料編8, 近代2, 自由移民名簿のp.737によると, 島袋ナベは戸主加那妻で, 中頭郡勝連村字比嘉88番地に本籍があり, 25歳8か月のとき, 夫の呼び寄せにより加奈陀へ渡航している。旅券は大正9年7月14日に下付されている。

(完)

(いしかわ ともり・琉球大学名誉教授・地理学)



写真1 北米沖縄県人会主催歓迎夕食会に  
参加の会員との記念写真

(1993年9月10日アメリカ合衆国本土・  
ロサンゼルス市にて石川友紀撮影)



写真2 帰米二世 県出身の東・フランク・  
盛勇氏と奥様(自宅前)

(1993年9月25日アメリカ合衆国本土・  
サンフランシスコ市郊外にて石川友紀撮影)



写真3 戦後渡航の沖縄県出身一世の方々

(1993年9月20日カナダ・バンクーバー市にて  
石川友紀撮影)



写真4 戦後渡航の県出身移民を含む一世、  
二世, 三世, 四世の方々

(1993年9月17日カナダ・レスブリッジ市にて  
石川友紀撮影)